
私立雨宮高校

破夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立雨宮高校

【Nコード】

N3233M

【作者名】

破夜兎

【あらすじ】

理事長の趣味(?)で時折生徒をスカウトする、私立雨宮高校理事長はいったいどんな目的で学生をスカウトしているのか？雨宮高校の生徒を主体にした、バトルコメディです！

その1 春休み（前書き）

ども

ど素人かつ、文章力ないのですが
読んで感想もらえたら幸いです。

今回は、適当にキャラクター紹介がメインのつもりで作りました。

その1 春休み

ここは、たきがきし さくら滝垣市笹倉。

つい先月までは、特に有名な物もなく、かといって田舎という訳でもない、よく日本にある街だった。

だが、先月に終了した駅周辺の大改造により、さくらえき笹倉駅周辺は活気だっていた。駅周辺だけは、まるで都会を思わせるかのような大勢の人、たくさんの建物に囲まれている。

100円均一から、高級ブランド専門店まで、この駅周辺で揃わないものはないんじゃないかと思わせるぐらいの店の数々。

この駅周辺は、通称で笹倉シャインパークと呼ばれていた。

だが、シャインパークを出てしまうと、あまり目立つ建物もなく、人気もまあまあになる。

シャインパークとその他でがらっと雰囲気が変わってしまう、これはこの街で常識になりつつあった。

さて、シャインパークの説明はこんなものでいいかな。

重要なのは、そう。しりつあみやこうこう私立雨宮高校だよ。

その学校は、駅の西口から出て、真っ直ぐ道なりに向かって行くと見えてくる雨宮橋を渡った先にある。あまみやばし

ちなみに雨宮高校は、かなりの金持ち学校で、雨宮橋から先は全部雨宮高校の私有地となっている。

この高校、学力も高いうえに、入学費も高いだけあり、施設は整っている。

なので、基本は金持ちの家のお坊ちゃまやお嬢様の入学が大半なのだが、ここの理事長はよくわからない事をする。

時々、特に学力がいい訳でもなく、家がお金持ちでもない人間を学校に関わる費用を全て無償で入学させる事がある。

なぜ入学をさせているのかは、完全に理事長の独断なので理由を知る者はいないという。

季節は春。ここにも一人、理事長の気まぐれによる、新入生がいた。

「ここが、笹倉。これから俺が暮らす場所か」

黒くてぼさぼさの髪、身長は171と男子の中では決してでかいという身長ではない。

彼の名前は桜優斗さくらゆうとやや緑色をした雨宮高校のブレザーとズボンを着ている。

彼は初めて笹倉を訪れたらしい。

駅から降りてすぐのシャインパークに戸惑いを隠しきれてない。

まあ、無理もないだろう。

彼が暮らしていたのは、田舎の道場なのだから。

「それにしても、すごい人だなあ」

自ら田舎者と説明している様なセリフを言う。

「とりあえず、新しく住む寮に向かうかな」

誰に言うでもなく、目的地を確認した彼は、駅から真っ直ぐ行つた所の夢心地荘ゆめこちせうを目指して歩き始めた。

最初は、駅周辺の人の多さに驚いていた桜だったが、駅から離れると人もそれほどではなくなり、若干の戸惑いは無くなってきたらしい。

「えーと、駅から真っ直ぐの道で三本目の信号を右折か……。この信号かな」

と

信号を右折しかかった時、彼の真後ろから声がした。

「なあ、いいじゃねえか。ちょっとお茶しようって言ってるだけじゃん」

と、

一人の女を囲んでいる男達の内一人が言っている。

なんなんだろう、この古典的な不良達は……

と呆れ気味に桜は考えていた。

だが、彼は困ってる人をほっとける性分でもなかったのだ。

「なあ、いいだろ？」

しつこく男は言い寄っている。

その男の肩をたたいて桜は

「やめてあげてください。困ってますよ？」

目には目を、歯には歯をで古典的なセリフを言ってみる。

「は？ なに、おまえ？」

「こいつ、この娘と同じとこの制服着てるぜ？」

「彼氏じゃねえ？」

と3人でマシンガン Took したと思うと、男達みんなで笑い始めた。

せつかく人が下手にでてやってるのに、と桜は思いながら

「いやだなあ、彼氏な訳ないでしょう……、そんな事より、あなたたちこそなんなんですかあ？」

小ばかにしたように、語尾の発音を上げて挑発する。

桜優斗が自分に課したルール、自分からは暴力を振るわない。

ただし、相手から暴力を振るってきた場合は、容赦しない。

「なめてんのかあ！」

そして不良の内1人が、まんまと挑発にのって手を出してきた……
と思ったその時。

「まちなさい！ その人は無関係でしょ？」

絡まれていた女の子が、桜と不良の間に割って入っていた。

風に、彼女の髪が舞っている。

流れてくる、シャンプーの香りは桜をうっとりさせた。

不良達の言った通り、桜と同じ制服を着ている。

と言っても、まったく同じじゃけでなく、下はスカートをはいている。
柄はズボンと同じだ。

そして、その少女の外見だが、一言で表すなら美しい、という言葉
が正しいだろう。

すらっとした体型にしなやかに肩まで伸びている漆黒の髪、唯一彼
女の弱点と言えば胸が小さい事ぐらいか。

身長は桜よりは小さいが女子の中では、まあまあの身長だ、おそらく160無いくらいだろう。

「ははっ、素直に俺達とお茶する気になったのかな？」

下品にその女子生徒を見ながら、不良はたずねた。

だが次の瞬間、

不良は足を押さえて倒れ、転げ回った。

「いっ、いてえ！！　くっそ、てめえ！！」

不良の右太ももには、深くナイフで刺した様な後があった。

いや、刺した様ではない。

刺したのだ。

誰が？

むろん、一人しかいないだろう。

絡まれていた女子生徒がやったのだ。

桜も他の不良達は愚か、刺された本人にさえ、気付かれる事なく足を刺したのだ。

傷は深かった。

大の男が悲鳴をあげ、転げ回るくらいだ。

軽くナイフで斬られたくらいではここまでならないだろう。

なんで刺された男が悲鳴をあげてるかわからない不良達だったが、何かをこの女子生徒にされたって事だけはわかった。

だから、不良達は一斉にそれぞれ罵声を吐きながら彼女に向かって殴りかかったのだ。

彼女は一人目殴りかかってくる男を体を反らすだけで避けると、殴りかかった勢いで、避けられた後も前進を続ける不良に足をかけて転ばせた。

そして、まただ。

また、見えない速さで太ももを刺した。

「いぎいいっ！？！？」

と悲鳴をあげる不良。

一体彼女は何者なんだろう？　という疑問が桜の頭に浮かぶ。

当然だ、助けようとした女の子が突然、自力で助かるのはおかしい。続いて殴りかかってきた不良だが、即座に返り討ちにあう。

ここまで合計3人の不良を倒した彼女だったが、さすがにめんどくさくなったらしい。

「あんたたち、まだやるの？」

と、このまま続けていたら不良を全滅できたものの、逃げる機会を与えてのだ。

不良達はまだやるか？ と互いに顔を見合わせていたが、不良達の中の一人が

「やめておこう、勝てる気がしない。お前らもそれでいいな？」

「なんだよ、光輝^{ヒカル}？ ビビってんのか？」

「そーだぜ、女相手にしっぱまいて逃げるのかよ？」

光輝と呼ばれた男は一番冷静だった。

どうして、こんな不良達と関わっているのかわからないほどに、冷静だった。

「ああ、逃げるさ。勝てないからな」

仲間の不良達の挑発には目もくれずに冷静に返す。

「ちっ、いこうぜ」

それによってやる気をなくした不良達は、文句を言いながら帰って行った。

「大丈夫？」

このセリフは、とても自然に聞こえるが、とても不自然だった。

なぜなら、このセリフを言われたのは、助けに入った桜の方だったからだ。

普通ならば、助けに入った人間が、助けた人間に向かって言うセリフだ。

だが、あろうことか本来助けられるポジションにいた人間が勝手に助かってしまった。

「ああ……、あの、あんた何者？」

とりあえずお礼を言った桜だが、やはり彼女が何者か気になるらし

くダイレクトな質問を試してみる。

それに対して

「え？ 私は生徒会長の伊藤美奈^{いとうみな}。あなた、見たことないけど新人生？」

と、自己紹介。

桜が知りたかったのは、そんな当たり前な自己紹介ではなくて、さっきのナイフさばきなのだが、あまり聞かない方がいいと思った桜は「あ、はい。今日から寮に住まわせてもらう事になってるんだ」話を合わせておいた。

「ふーん。道理で見ない顔なわけね」

桜の顔をまじまじと見ながら言う。

「てか、寮に住むって事は理事長に声かけられた？」

「ああ、なんでも費用は全てこちらで担当するからって」

「ふーん。私とおんなじね」

先程のカリスマに溢れた姿とは違い、無邪気な笑顔を桜に向ける。

内心、桜はドキッとしたのだが、そんな事は顔にも出さずに

「同じ？ 同じって何が？」

と疑問をなげかける。

「私も理事長にスカウトされたのよ。最初は、勉強のレベルの高さについていけなくて困ったわ」

その疑問に対して、自分の体験をつけて答える伊藤。

今でこそ、生徒会長と言うポジションにいる伊藤だが、初期の頃は勉強はあまりできなかったらしい。

「で、君はなんか特技でもあるの？」

「特技？」

「そ。理事長がスカウトするのは妙な特技を持ってる連中だって噂をされてるの」

「会長はなんかあるの？」

「ん、さっきからタメ口だね？」

突如、ひやりとした空気が充満する。

伊藤の表情は、いたって笑顔なのだが、明らかに殺気を纏《まと》っている。

「いやだなあ、伊藤先輩。俺がタメ口聞くわけないじゃないですかあ」

何かを悟った桜は、態度を改める。

「よろしい。もし、先輩に後輩らしからぬ態度をとったら、切断だから」

先程のナイフを右手に輝かせ、にやりと笑みをこぼす伊藤。この時、桜が身震いをしたのは言うまでもない。

そして、先輩の特技とはあのナイフなのだろうと理解した。

「で、君の特技は？」

私のは教えたんだから、と言わんばかりに、聞いてくる伊藤。

「特に変わった特技は無い……つもりなんですが」

「ふーん」

特に、興味を持っていた訳では無かったらしく、伊藤は素っ気ない反応を示した。

「まあ、その内わかるよね、楽しみにしてるよ。じゃねえ」

そして、自分が伝えたい事だけ伝えて、すたすたと寮に向かって行く伊藤。

「なんか、凄い生徒会長だなあ」

凄い。

と言うのには、いろいろな意味がこめられている。

あの後、桜は伊藤の寮とは隣の男性寮に向かって。

部屋まで案内してもらった。

「お前、新人生？　これからよろしくなあ」

部屋に入ると、黒いスエット姿、黒髪をピンで整えた、男が居た。

「よろしく」

桜は一言、そうゆうと部屋にあるベットに向かった。

「どっちが、俺のベット？」

ベットは二段になっていて、さほどスペースをとらない。

「上がお前のベットだな。俺は寝相悪いから下がいいさ。そーいや、名前聞いてなかったな」

ベットに上り、荷物を整理しながら

「桜優斗。あんたは？」

と答える。

「おいおい、先輩にあんたはないだろ」

桜は、しまったと思い

「すいません」

とりあえず謝しておく。

「まあ、いいって。次から気をつけな。俺は三井恭介。みついきようすけよろしく」

そう言って手を出してくる三井。

「よろしく」

とそれに答える様に、桜も手をだしお互い握手をかわす。

「でさ、なんか聞きたい事とかある？」

三井は陽気な人間らしくへらへら笑いながら、聞いてくる。

「あの、飯ってどこか食べれるとこないですか？」

「飯か、飯は学食とかファミレスとかで食べてるなあ。てか、優斗はまず寮の規則を知るべきだな」

「はあ。てか、優斗って……」

いきなりの馴れ馴れしさに戸惑う桜。

だが、三井はそんな事お構いなしに話を続ける

「規則ってのは、簡単に言えば門限を守れて話だ。他は特に無い」

「へえ…、私立の寮ってもっと厳しいと思ってました」

「一般生徒が使う寮は厳しいらしいが、理事長にスカウトされたやつらが住んでるこの寮は特に規則は無い」

「意味不明な優遇ですね」

「まあな。スカウトの理由も意味不明だし、いんじゃない？ こっちだってそのほうが楽だしな」

「まあ、そうですね」

「だろ？ んでもう門限過ぎてるから、飯は無理だな」

「マジですか？」

「マジだよ。門限は23時だからな」

「はぁ……」

深いため息をつく桜

「お前飯食ってないの？」

「はい。ちよつと食べそこねちゃって」

「んじゃ、これ食えよ」

三井は自分の机についてる引き出しをあさる。

すると中からはカップラーメンが出てきた。

それを、桜に投げる。

桜はキャッチをして、

「ありがとうございます」

と一言。

「んじゃ、俺は寝るから」

三井はその後、すぐにベットに潜り込んで、眠ってしまった。

桜もカップラーメンを食べ終わると、自分のベットに入り眠った。

翌朝、学校の登校日は1週間後だったので桜が目覚めたのは、午前10時過ぎだ。

「よ、おはよう！ やっぱり、都会は疲れたか？」

桜がベットのほしごを下りると、三井がテレビを見ながら問いかけてくる。

「まあ、田舎者には疲れますね」

率直な感想を伝えて、外出用に新しい私服に着替える桜。

「ん？ 出かけんの？」

「はい。ちよつとシャインパークを見たくて」

「そうか、気をつけてな！。不良に絡まれない用に」

と三井なりの忠告を伝えて、桜を見送る。

「ったく、初日から生徒会長と関わるって、どんだけ運が悪いんだ

よ」

桜が部屋を出てから一人で、三井はこんなことを言っていた。

時間はお昼。

桜はシャインパークの飲食店、「ミラ喫茶」に来ていた。

適当にぶらついて、おなががすいてきたのでどこかでご飯を食べようとしたところ、一番近くにあった店がここなのだ。

田舎者の桜には、シャインパークにある飲食店のディスプレイは、どれもおいしそうに見えて仕方なかったので、適当に一番近くにある店に入店したのだ。

「ご注文、お決まりですか？」

桜が、メニューとにらめっこしていると、双子のウェイトレスの内1人が声をかけてきたので

「いや、まだ決まってるじゃないよ」

と当然の返事をかえす

「もしかして、悩んでます？」

「あ、うん。こういうところあんま来ないから」

「へえー、地元の人じゃないんですか？」

「いや、昨日引っ越して来たばかりで」

「なるほど、田舎者さんですか」

「まあ、そーゆう事になるね」

実際田舎者なので、田舎者扱いは仕方ないと思った桜は特に怒った様子も無く返事をかえす。

それに、彼女の田舎者さんと言う言葉には、嫌味がないと感じていた。

「ふふー、では私のお気に入りメニューを教えてください」

両手を腰にあて、ほとんど無い胸をむんつと張ってそんな事を言う。ここで初めて、桜はメニューから顔をあげて彼女を見た。

彼女は見た目は小柄なものの、その茶色がかったショートヘアと雰囲気はどこと無く落ち着いている。

一方、桜の席から離れた場所でオーダーをとっている双子の片割れは身長はほとんど一緒なのだが、茶色のツインテールにやんちゃな雰囲気だ。

「是非頼むよ」

桜は実際何を頼もうか、まったく見当もついてなかったので、彼女にまかせる事にした。

「はい。じゃあオムライスAセットね！ 紅茶とアイスがつきまーす！」

と元気よくお気に入りメニューを説明する彼女は、なぜ大人の雰囲気が出たのか？

と思わせるほど無邪気だった。

「ソースはデミグラスとホワイト、どっちがいいですか？」

「オススメは？」

せっかくお気に入りメニューを教えてくれたので、桜は最後まで頼む事にした。

「やっぱりホワイトソースですね」

桜の注文は、ホワイトソースオムライスのAセットに決まった。

「それでは、少々お待ちくださいませ」

注文を取り終わると彼女は裏に戻って行った。

最近のファミレスなどなら、電波で厨房に注文が行くので戻る必要などないのだが、この店は注文が手書きなので、いちいち厨房に注文を伝えなくてはいけないのだ。

彼女が裏に行ってから数分でアイステイヤーが運ばれて来た。

「お待たせしました！ アイステイヤーになります」

小指でワンクッション入れて音がたたないようにグラスをテーブルにおく。

「アイスでよかったよね？」

もう持ってきてしまってから聞いてどうする？

などと桜は考えたが、この人込みを歩いて暑い中ホットを飲む気などなかったのだ。

「うん。ありがとう」

と素直に受け取る。

「よかった。じゃ」

と彼女はすぐ他の席のオーダーに向かっていく。
入れ代わりで双子のもう一人がやってくる。

「なんだ？ 注文なら終わってるよ」

「違うよ！ さっき妹と仲良さそうに話してたからさ、友達なのか
なあーって」

「いや、初対面。ってか妹！？」

「うん、私がお姉ちゃんなんです！ そのリアクションはどういう
意味かなあ」

桜は、てっきりこちらが妹と思ってたので驚きを隠せない。

「いや、てっきりあんたのが妹だと思ってた」

「むうー。まあいいけど、最初はみんな驚くもんねー！ てか、初
対面で家の妹を魅力するなんて！？ あなたただ者じゃないわねえ
ー！！」

と一人騒いでると

後ろから双子の妹がやって来て……

「はい。姉さんちゃんと働いて下さいねっ☆」

背後から明るい声をかける。

あくまで明るいのは声だけだ、そう、声だけ。

それを言われた姉さんかというと
ぶるっ

と一瞬身震いをして

「あ……、はい……」

と返事をして

逃げるように厨房へと下がって行った。

「姉がすいません」

「いや、気にしないでいいよ」

「あ、はい。オムライスになります」

とたまたも器用にテーブルにお皿を置く。

「ありがとう」

と言

彼女はニコツと笑うと他の席へオーダーに行ってしまった。

桜はさっそくオムライスを食べる。

「うまい。さすがお気に入りだな」

とつぶやきまたスプーンを動かし始める。

そのまま、特には彼女と話すことはなくアイスを食べて店を後にしたのだ。

「ただいま」

寮に戻って来た桜は挨拶をするが、誰もいない。

「留守か」

三井はどこかに出掛けていて、特にやる事もなかったので田舎者には疲れた体を癒すため、寝ることにした。

学校が始まったらどれだけ大変かわからない。

休めるうちに休んでおこうと桜は眠りについた。

その1 春休み（後書き）

やはり

読みにくかったかもしれませんが

感想があると

やる気になれる！

ので是非感想いただきたいです

その2 入学

「ふぁーあぁ」

などと間拔けた声をあげて目覚ましを止める桜。

「おはようございます。先輩」

と挨拶をして三井のベットを覗き込むと、三井はまだ寝ていた。

「はぁ……、この人もしかして遅刻の常習犯？」

ぼやきながら、桜は入学式の準備をする。三井が使っている部屋には、電化製品があまりなく、トーストすら作れない状況。

「朝飯どうするか」

桜が悩んでいると

「寮専用の食堂があるから、そこで1日3食タダ飯食えるぜ」といつの間にか三井が起きている

「寮に食堂なんてあったんですね」

「ああ。春休みはやってないからな、教えてなかった」

「で、どこですか？」

「一階の入り口からまっすぐ突き当たりだよ」

「ありがとうございます。じゃ」

だいたいの支度を終えてた桜は荷物を持ってさっさと部屋をでていく。

「冷たいねえ。つか、遅刻する！」

三井は急いで準備を始める。

一方桜は、食堂に到着していて、もう列に並んでいる。

列の先頭では、なんか学生寮に相応しくない……

というか、率直に言えばメイドらしき人が注文を聞いては、お皿に盛っていた。

「何にしますか？」

桜が先頭までやってくると、メイドが聞いてきた。

「ご飯と味噌汁と目玉焼きで」

桜は、何故メイドがいるんだ？

などと考えたが、まだ後ろに列があったので、直接聞く事はできずに注文した物をトレイにのせ、適当な席に着いた。

「ふう……、いただきます」

桜は誰に言うでもなく、いただきますの挨拶を済ませる。

「あれだね。律儀だね」

隣には、あの生徒会長様がいた。

「あれ？　なんでいるんですか？」

「なんでって、食事するために決まってるわ」

「なんで、男子寮にいるんですか？」

と、桜は目玉焼きを食べながら聞く

「ああ、そうゆうこと。食堂はねえ、男子寮と女子寮から繋がってるのよ」

生徒会こと伊藤は桜が入って来た扉から、対角線にある扉を指しながら言う。「なるほど」

と一言かわし、みそ汁をすする。

「それじゃ、あたしは先に行くわ」

「それじゃ」

と挨拶を交わして伊藤は女子寮側の扉へ消えていく。

「ふう。お前、気に入られてんのな」

いつの間にか支度を終えた三井が、後ろからやってくる。

「気に入られてんですか。まあ、嬉しいような悲しいような感じがですね」

最後のご飯を食べながら言う。

「まっ、なんにせよ、よかったじゃないか。あいつは敵に回さないに限る」

と話している三井をよそ目に

「ごちそうさま」

桜はトレイを片して、男子寮側の扉へと消えていく。

「切ないな。早いところ食べないと遅刻だな」

時間は10時過ぎ

桜はもう、自分が座るべき場所に座っている。

入学式だ。

面倒な理事長の話などは終わり、次の項目が司会の先生により、読み上げられていた。

「続きまして、生徒会長より、新入生歓迎の言葉」

ステージの脇から伊藤が現れ、ステージ中心の演台に到着

新入生達はがやがやし始める。

それはそうだ。

伊藤はナイフを振り回すところ以外は、パーフェクトレディなのだ。生徒会長が美少女という設定にざわめかないはずがない。「えー、新入生のみなさん。私立雨宮高校にご入学おめでとうございます！ここで過ごす3年間で皆さんにとって、掛け替えの無い物になることを心より願います」

話が終わると、伊藤はぺこりと頭を下げ再びステージの脇に下がって行った。

桜は、伊藤の会長らしさに呆然とするしかなかった。

桜は入学式を終えると、自分のクラスへと担任に案内されて到着した。

「あれ？この間の田舎者さんじゃないですか？」

担任が生徒手帳を準備している間、特に話をする相手もいなかったのぼーっとしていた桜に話かけてきたのは、春休みに食事をした時にいた双子の一人だ。

「あれ。同じ学校だったんだ」

桜は、顔を見た瞬間に彼女の事を思い出す。

「それ、こっちの台詞だよ。てっきり、田舎から、ちょっと春休みに電車で来た人かと思ってた」

「一応、寮で生活してるんだけどな」

「ふーん。私はあの食堂の2階に住んでるの」

「へえ。それで手伝いしてたのか」

「あれは、アルバイトよ。お小遣稼ぎ」

「なるほどね」

と話込んでいると

「はいはい。みんな席につけ。」

と教室のドアをガラツと勢いよく開け、入って来たのは、担任の風原楓《なぎはらかえで》先生。

みんな自分の席につく。

見た目は黒髪ショートにスーツ姿と、とても出来る人間に見えるが、中身は先生と言うより、姐御ってタイプだ。

「あい。じゃあみんな入学式お疲れ、だるかったよねえ、先生もだるかったよー。でこれから生徒手帳を配ります」生徒手帳と資料が配られ、面倒な話が終わると、すぐに放課後になった。

桜はやる事が無いのですぐに寮に戻った。

「ただいま」

「「おかえり」」

桜に対して返って来た返事は二人のものだ。

一人はもちろん三井、もう一人はというと……

「で、きょう君？　ちゃんと学校来てくれないかしら？」

超威圧的な口調で三井を説得する彼女は、そう、生徒会長こと伊藤美奈だ。

「別に、あんたに関係ねえだろ？」

それに対して三井が反論するが

「関係あるから、私生徒会長だからね？　しかも幼なじみ！　きょう君に休まれると困るのよ」

と返される

「ああ、もう、うるさいなあ、やるか？」

「いいわよ。別に何回やっても負けるのはきょう君の方だし」

いがみ合ってる二人から、殺気がほとばしる。

桜はというと、入口で呆然とその光景を眺めていた。

「んじゃ、外いくぞ」

「いいわ」

三井の誘いにのり二人とも外に出る。

いきなり三井はどこからともなく日本刀を取り出し、そのまま伊藤にきりかかる。

「だりゃあ！」

三井の罵声虚しく

「あまい」

軽々しく、片足を引いて刀をかわす伊藤。

そして、そのまま足をかけて転ばせる。

体制を崩して盛大に転んだ三井の頭を踏み付けて決着。

「はい。明日からは学校に来なさい」

「ちっ」

抵抗しても無駄とわかってるのか、三井は抵抗なしに舌打ちをするのだった。

「え、えーと、喧嘩はやめて下さい」

とりあえず適当にとめに入った桜。

「うん。この辺にしとく」

とあっさり、伊藤は撤退していく。

「あいつ、魔物だろ」

「確かにやばいですね」

と伊藤の姿がなくなってから二人の男は語った。

その3 桜VS会長（前書き）

今回は、バトル描写に気合いをいれたんですが。
若干読みにくいかもしれません……
ご了承ください！

あと

アドバイスをお願いします。

その3 桜VS会長

「あいつは、化け物だ」

休日の昼下がりに、そんな事を部屋で言ってるやつがいる。
みついきようすけ
三井恭介だ。

「はあ……」

それを聞かされる不幸な後輩、桜優斗《さくらゆうと》。

「しかも、会長だけあってほとんどの生徒の能力を記憶してやがる」
「で？」

「で、だ。新入生のお前なら能力がばれてないから、会長に勝てるんじゃない？」

いきなり無理難題を桜にふっかける三井。

「待ってくださいよ。さすがに、会長に喧嘩を売るのはマズイですよ。俺別に喧嘩する理由がないし」

「いいじゃないか。手合わせだよ、稽古だよ」

「そんな事いつでも」

桜だって闘いたいと思う相手ではない。

異性という時点であまり気が進まないのに、ましてやあの实力を持つ会長とやりあいたいとは思えない。

「まあ、普通やりたくないわな」

三井は案外あっさりと諦めた。

心の中で桜がほっとしたのは言うまでもないだろう。

「そんな事より、お前今日暇？」

諦めたかと思うといきなり話題を転換してくる三井。

「はい。一応予定はありませんが」

「ふーん。そうか、んじゃ夕方5時くらいに線路沿いの公園に来てくれ」

三井は突拍子もなくこんな事を言い出した。

「いったい、公園に呼び出してなにをするつもりなのだろうか？
だが、桜には差ほど気にならなかったのだろう。」

「え？　でも公園どこだかわかんないです」

「ああ、笹倉ささくらえき駅から線路沿いに行けば着くよ。どっち側に行くかは
駅の地図でわかるしな」

まるで用意していたかのような三井の説明。

「わかりました」

だが桜には一切の疑いの心が無かった。

時間までまだあったので桜は何をするでもなくシャインパーク
をぶらついていた。

すると後ろから不意に声をかけられた。

「あれ？　田舎者さんじゃないですか」

双子のしっかりした方、つまりは妹が声をかけてきた。

「公衆の面前で、田舎者呼ばわりはひどくないか？」

「失礼しました」

無邪気な笑顔で謝る彼女。

やはり、悪気はないのだろうと桜は納得していた。

「で、なんて呼べばいいかな？」

「俺は桜優斗さくらゆうとって言うんだ」

「へえー、じゃあ優斗で」

「うん…」

若干照れ臭い桜だが、嫌な気はしなかったので断らなかった。

「で、俺はお前をなんて呼べばいいかな？」

「ああー、私は三ッ葉みつばはるみ春海はるみっていうの！　好きに呼んでいいよ」

「じゃ、三ッ葉さん」

「他人行儀じゃない？」

「三ッ葉？」

桜はぎりぎりまで粘った。

名前で呼ばないように。

だが、彼女の無邪気さに勝てるはずがないと思い知らされただけだった。

「なんかやっぱ他人行儀だよー。春海って呼んでよ」

「いや厳しいかなー」

「えー、私は名前で呼んでるのに？ ひどいよー」

またしても無邪気に怒りだす彼女に負け、結局桜は三ッ葉を春海と呼ぶ事になったのだ。

「で、優斗は何しに來たの？」

くだらない呼び方についての口論が終わると、春海が桜に尋ねてきた。

「いや、特に何かをしていた訳ではないんだ」

「じゃあ、一緒にまわりませんか？」

桜に用事が無いと知ると春海は桜を誘ってきた。

「ああ、いいけど4時半には用事があるから」

「わかった。じゃ、いこっか！」

桜は腕を春海に引っ張られて、連れていかれるのであった。

三ッ葉は「まずは腹ごしらえですね！」などと言いながら、そのまま桜を引っ張ってスイーツメインのお店に入店していた。

桜が、違う店にしようと抗議したのは言うまでもない。

スイーツメインなんて、男子はあまりおらず女子ばかりだ。

そんなところに入りたいとは思えないだろう。

真面目な男子ならばの話だが……

「お昼って、ここスイーツメインのバイキングだよな？」

「はい。一度来てみたかったですけど。一人ではちょっと行きづらくて」

「いやだからといって、俺を連れ込むなよ。友達とか姉と来ればいいじゃないか」

と桜が聞くと

「友達はみんな甘いのが苦手なんです。ねえさんも苦手なんです」

「へえー、女の子はみんな甘いのが好きと思ってたよ」

「それは優斗の勝手な妄想でしょ」

怒られてしまう桜。

それにしても、妄想はひどい。

桜はそんな事を考えていた。

「ま、そんな事はいいいから食べようぜ？　せっかく来たんだから」
「はい！」

桜も甘いのは好きだったので、入店まではいやいやだったが、入ってしまっただけは意外とノリ気だったのだ。

こうしてスイーツバイキングで腹を満たした後は、二人で雑貨屋などをブラブラとしていた。

ふと時計を見ると、4時を過ぎていたので桜はそろそろ切り上げようとしていた。

「悪い、そろそろ時間なんだけど。道を教えてもらっていいか？」

「いいですよ。場所はどこですか？」

「線路沿いの公園って言ってた」

「多分ここからあっちがわに行けばあります」

凄くアバウトな道説明だったが、線路沿いなのだから迷う事も無いだろう。と桜は思い。

「わかった。ありがとう」

と言い残して、あっちと言われた方に向かって行った。

三井が何をたくらんでいるのかも知らずに……

「ん、あれかな？」

桜はあれから、線路沿いの道を歩いていた。

あれと言うのは、遠くに見えてきた公園の事だ。

公園についてもまだ時間は4時40分だったので、ベンチに座って待つことにした。

なにをするわけでもなくボーっとしていると、見たことがある人が公園に入ってきた。

噂の生徒会、伊藤美奈だ。いとうみな

一体なにをしに来たんだろうか？
声をかけてみる事にした。

と桜は疑問に思ったので

「あの、どうしたんですか？ 先輩」

桜が近づいて声をかける。

すると、伊藤はフツと笑って

「ここはね。思い出の場所なの」
と遠い目をして話始めた。

「あれは、私立雨宮高校しりつあまみやこうこうに入学して、私が生徒会に入った時だったわ」

思い出を語り始める伊藤。

桜はただ聞いていた。

1年の頃の伊藤だ。

容姿はまだ少し中学生さがるが、やはりカリスマ的なオーラにつつまれている。

伊藤は高校に入ってから、生徒会活動に力をいれていた。

そんな時、彼女に一通の手紙が届いたのだ。

内容は次の通りだ。

お前、最近生意気なんだよ！

俺と決闘しろ！

線路沿いの公園で待ってるからな！

三井恭介より

なんとも言えない果たし状だった。

しかし桜は約束通りに線路沿いの公園に現れた。

まあ、結果はいうまでもないだろう。

伊藤の完勝で決着したのだ。

そこまで話すと、伊藤は殺気をまとい始めた……

「あの、先輩？」

「まさか、また私に決闘を申し込む馬鹿がいたとはね！」

そう言いながら、くしゃくしゃに丸めた紙を桜に投げつける。

それを受け取り、広げてみるとこんな文章が書かれていた。

あなたに決闘を申し込みます！

夕方5時に線路沿いの公園に来て下さい。

ムネナシ会長へ

桜優斗より

「ふふっ、覚悟はできてるわね？」

伊藤は両手に手刀を構える。

「え？ なんの事ですか？」

一応桜も構えるをとり、攻撃にそなえる。

「とぼけても、無駄よ！ 私にムネナシとは片腹痛いわ！ 今は巨乳より美乳の時代なのよ！」

そう言いながら、走り込んできた伊藤は、一瞬の内に6発もの手刀を叩き込んできた。

それを桜は、腹部周辺と顔面に向かってきた4発を両手を使ってガードした。

だが、肩を狙ってきた2発を防げずに

「……っ!？」

その場に肩を抑えながら、膝をつく。

「まだ、私の傷ついた心は癒えないわ！」

さらに追い撃ちをかけようとする伊藤。

追い撃ちをくらったらずい！

とっさに桜は、後ろに飛びのいて距離をとる。

後ろに飛ぶ。

まさに文字通りで、超人的なジャンプでかなりの距離をとる。

「あら、なかなかやるのね」

伊藤はそれを見ても、余裕を見せる。

また、攻撃しようと伊藤が桜に走り込んでくる。

すると桜は、両手を合わせ、その合わせた手と上半身を右下に向ける。

「なに、その妙な構えは？」

伊藤は構わずに突っ込む。

だが、桜の力を目の当たりにする事になる。

「桜流闘技風波弾！」
さくらりゅうぎふうはだん

桜は、その体を左上に向かって振り上げた。

すると、空気の固まりが真っ直ぐに伊藤に向かって飛んでいき、伊藤を吹き飛ばした。

「えっ？」

痛みは無かったが、宙に投げ出された伊藤は驚き戸惑っていた。

このまま落下すれば、致命傷は避けられないだろう。

先程までふわりと宙に投げ出された伊藤は、急速に落下を始める。

地面がどんどん近づく。

桜は受け止めようとしていたのだが、大事な事を忘れていた。

伊藤の手刀により、肩がダメージを受けているのだ。

上から落下してくる、伊藤を受け止めることはできないかもしれない。

だが、体が先に動きだしていた。

そして、伊藤がある高さに来た時。

「どいてろ！」

茂みから声がした。

そして、伊藤は受け止められていた。

声の主、三井によって。

「危なかったな、お前のまけだ」

そして勝ち誇った顔で三井がいった。

だが、桜と伊藤は気づいてしまった。

あの果たし状は、こいつがつくったのだと。

この後、三井が二人にボコボコにされたのは言うまでもないだろう。

その3 桜VS会長（後書き）

どうでしたか？

まあ、読んでて

読むのが面倒になってきたよ！

って人は沢山いたと思いますが、今後の成長に期待という事で！

では

その4 姉川圭夜《あねかわけいや》（前書き）

今回は能力を持った生徒ではなく、正当法でしりつあまみやこうこう私立雨宮高校に入
学した生徒が登場させました。

と言っても、結局はバトルですが。

その4 姉川圭夜《あねかわけいや》

「おはようございます先輩」

朝の挨拶を交わすのは、相部屋の桜優斗さくらゆうととその先輩三井恭介みついきょうすけだ。

「おはよう……。体が痛いよ？」

三井は遅刻の常習犯にも関わらず、今日は早起きをしていた。

多分正確には違う。

早起きしたのではなく、早く起きてしまったのだ。

そう、あまりの痛みに……。

「お前ら、打ち合わせでもしてたの！？ 何、あのコンビネーションは……！」
そう。

三井が体を痛めたのは、あの決闘の後の出来事だ。

桜ともうひとり、決闘の相手であった伊藤美奈いとうみなに、決闘を仕組んだのがばれてしまい……

「あら、きょう君？ 偶然ねえ」

爽やかな笑顔

「あ、先輩も来てたんですかあ？」

爽やかな笑顔

「いくわよ？ 桜君？」

爽やかな笑顔

「はい！ 会長！」

爽やかな笑顔

「あはは……。偶然だね、俺も公園に……」

ひきつった笑顔を見せた三井は

「桜流闘技風波弾！」
さくらりゅうとうぎふうはだん

の掛け声と共に宙を舞い、その無防備な状態から伊藤の手刀をくらっていた。

「あれは鬼だろ！！ いや、鬼神だろ！！」

三井はその光景を思い出しながら桜に叫ぶ

「いやいや、先輩が悪いですよ、あれは。そんな事より朝食行きましょう」

桜は三井を強引に連れて行くのであった。

「痛いよ？ 昨日の傷が痛いよ！？」

廊下には朝から三井の悲鳴がこだました。

「はい、今日の授業はここまで。予習復習しなさいよ？ 一応有名な学校なんだからさ」

不謹慎な事を言いながらクラスを去って行く担任風原《なぎはら》先生。

すると、他クラスの生徒が入りこんできて

「姉川圭夜あねかわけいやいるかあ？」

ガラの悪い生徒がぞろぞろとクラスに入ってきた。

関わりたくないのか、ほとんどの生徒がさっさとクラスを出て、残ったのは桜と三ツ葉みつばはるみ春海と数人になった。

「早くでてこいよ！ 出てこないと関係ない生徒も痛い目を見るぜ？」

そして、痺れを切らしたのか不良達は春海を捕まえて脅しを始める。

「やめてください！ 痛いですよ？」

若干のんきな春海だった。

「やめなよ。俺は別に関係ない人をボコられても名乗らないよー」
くつくくと笑いながら、不良の前に姿を現した男子生徒。

髪は手入れされてるのか、男にも関わらずさらさらしている、身長は桜より少し高いくらいで男子の平均か、その動きから見て取れるのは優等生という雰囲気。

それはそうだろう、彼は自力で学校に受かっているだけではなく、特待生試験に合格している。

「へっ、お前か？ 一般生徒のくせに調子にのってるってのは？」

「はい、俺ですが何か？」

「ちっ、調子のんなよ？ お前の彼女はお前に喧嘩で勝ったら俺に付き合うつってんだぜ？」

「ふーん」

興味なさそうに姉川はよそ見をしている。

「お前みたいな勉強だけのやつに」

不良は右手を広げ、手の平を上に向けると、そこに火の玉が発生した。

マジシャン？

いや違う。

彼もまた、学園長が連れてきた特殊な学生なのだ。

「能力者が倒せるか？」

「まあまあ、俺も喧嘩はしたくない。てか、ここでやったら学校燃えるよ？」

たんとんと姉川は語る。

だがこの事態に対応しようとしている人間がもう一人いる。

桜だ。

友達になった春海を見捨てられるほど彼は冷たくはない。

だが、春海が人質にとられている以上下手な真似はできない。

そこで、様子を見ているのだが、姉川は相手を挑発していて、いつ春海に手をだされるかわからない。

桜はひやひやしている。

相手は全部で5人。

春海は後ろの二人に捕まっている。

どうしようか迷っていると、姉川が桜に向かって、丸めた紙を手首を使ってきれいに渡す。

不良達からは、姉川が壁になっていて完全に死角。

メモにはこう書かれていた。

「俺が注意をそらすから、教室の外から周りこんでかまえとけ！」

姉川は桜が行動を起こすタイミングを計ってるのに気づいてたのだ。

桜は、一般生徒に紛れて後ろのドアから廊下に出ると、教室の前のドアの前でかまえた。

しかし、どんな方法で注意をそらす気なんだろう？

と桜が考えていると。

「あは、手がすべっちった」
ドス

「なっ！」

姉川が先頭にいた能力者の顔面をぶっ飛ばしていた。

「お前こっちは人質が……」

「いねえよ！」

不良が行動を起こすよりも早く、桜は春海を捕らえたふたりを殴り倒した。

「ぐはっ!？」

桜と姉川の攻撃により、残る不良は2人になっていた。

能力者は姉川の一撃で気絶し、春海を捕らえていた二人も桜の攻撃で気絶していた。

「ああ、君！ 駄目だよ喧嘩は！（笑）」

姉川は満天の笑顔で桜にこんな事を言っていた。

「つい、手がすべってね！」

桜もそれに対して、にっと笑って答え、残りの二人の内一人に左右から殴りかかっていた。

「かぶったねえー」

凄まじい勢いで血を流しながら、二人の内一人はそこで倒れる。

残りの一人はと言うと……

「ひ、ひいいい!？」

悲鳴あげて逃げていた。

桜と姉川はお互いハイタッチをしていた。

「あ、ありがとうございます」

春海はきよとんとしていた。

「とりあえず、助かったよ。ありがとう！」

相変わらず、へらへらした態度と口調で姉川は桜にお礼を言う。

「そりゃ、どーも。次からは一般生徒巻き込まないでくれよ」

「いやー、悪い悪い。流石に5人相手じゃ厳しくて」

「お前、俺が闘えると知っててやったのか？」

「ああ。でも、あの子が人質にならないと、君もやる気は出さない
だろ？」

姉川は、桜を利用するために、わざと春海を巻き込んだのだ。

「そうか。一発殴らせろ」

「大丈夫。怪我をさせるつもりは無かったし。悪かったとも思っ
てる」

「だが、一般生徒に恐い思いをさせたのは事実だろうが！」

桜は姉川の胸ぐらを掴んで怒鳴る。

「悪い。一発で謝罪になるならやってくれ」

姉川は意外にも素直に桜の要求をのんだ。

だが、桜が姉川を殴る事は無かった。

「私なら大丈夫ですから、やめて下さいね？」

姉川と桜の間に、春海が割って入って来たからである。

「……」

桜は落ち着くと。

「悪かった」

と一言残して教室をでていった。

「きみたち、カップル？」

「ち、違いますよ！！」

そして、教室に残ったのは緊張感に欠ける二人だった。

その4 姉川圭夜《あねかわけいや》（後書き）

流石に感想、アドバイス無しだと

この作品がどうとらえられてるかわからないから、厳しいかな。
だれか感想を下さい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3233m/>

私立雨宮高校

2010年12月19日03時41分発行